

有田・小田部 38

有田遺跡群第202次調査



2003

福岡市教育委員会

序

有田遺跡群は昭和40年度の調査以来、あらゆる開発の審査を行い、それに伴う発掘調査を毎年行ってきました。その結果、平成12年度には、市内で初めて調査回数が200次を数えるに至りました。遺跡の内容も、発掘当初から注目された弥生時代初頭の環濠の他、全国的に珍しいミヤケの可能性が高い遺構群、奈良時代の早良郡衙、大規模な戦国期の平城など、注目すべき遺構群が見つかっています。今回報告するのは、有田遺跡群の最北部の占墳時代前期の墳墓で、青銅鏡が出土するなど、重要な成果が上がりました。

最後になりますが、発掘調査の実施から報告書の作成にあたり、株式会社松本組に多大なご協力を賜りました。お礼を申し上げますとともに、本書が研究資料として活用され、文化財保護の一助になれば幸いです。

平成15年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 生田征生

例　　言

- 1 本書は共同住宅の建設に伴って平成13年度に調査を実施した有田遺跡群第202次調査の調査報告書である。
- 2 本書に掲載した遺構の実測は、米倉秀紀・宮原邦江・遠藤茂・中野康平が行った。
- 3 本書に掲載した遺構及び遺物の写真撮影、遺物の実測、図版及び編集・執筆は米倉が行った。
- 4 出土青銅鏡のクリーニング及びX線写真は福岡市埋蔵文化財センター比佐陽一郎の協力を、出土スクライバー所見については埋蔵文化財課吉留秀敏の協力を得た。
- 5 本書に関するすべての資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管する予定である。

本文目次

1 調査区の位置と立地	1
2 調査に至る経緯	1
3 調査の記録	3
(1) 調査の経過と調査の概要	3
(2) 遺構と遺物	4
4 まとめ	13

図版目次

表紙	SO01 出土鏡と鏡出土状況
図版1	調査区全景・調査区土層断面・SK07
図版2	SK02・SK04・SO06
図版3	SO03
図版4	SO01
図版5	SO01 主体部
図版6	出土遺物1
図版7	出土遺物2
裏表紙	SO01 出土顕微入り土器

調査番号	0117	遺跡略号	ART-202	分布地図番号	宝見81	遺跡主番	309
所在地	福岡市早良区南庄3丁目255の一部	面積	256	調査期間	2001年6月18日～9月7日		
敷地面積	811 m ²	調査面積	502 m ²	種別	古墳時代の墓地 (方形周溝墓・円形周溝墓)	他	

1 調査区の位置と立地

有田遺跡群は早良平野北部の八つ手状に複雑に入り出する独立台地上に立地している。現在では台地の最北部から海まで1.5kmあるが、往時は遺跡のすぐ北側に海が湾入していたと考えられる。調査区は遺跡のもっとも北側の細い台地上にあり、調査区からは玄界灘が一望できていた。調査区はこの細い台地の西端にあり、調査区西側は3m近い高差がある崖で、北側・南側へは穏やかに傾斜している。ただし、旧地形図や戦後すぐの米軍の航空写真を見ると、台地の落ちはさらに西側の道路の西側にある。東側は細い台地最北部近くの中央部であるが、台地西端の方が高い地形になっている。現在の標高は西端で約6.6m、東端で5.9mを測る。

付近では以前から古墳時代前期の墳墓が発見されており、南側隣接地の第85・89次調査では当調査区に続く円墳状の周溝が検出されている。東側の第178次調査では、円形周溝墓（もしくは円墳）7基が検出されている。内部主体は様々で、竪穴式石室・木棺墓・土壙墓・石棺墓・石蓋土壙墓などがある。組合せ式木棺墓からは小型仿銅鏡1面と両腕に勾玉と小玉からなる腕飾りが出土した。また、1973年には図11のドットの地点で箱式石棺が発見されている。台地の東端の第97次調査では古墳時代の土壙墓や初頭頭の壺棺墓がある。またこれらの調査地点の南側には3基の円墳があり、明治年間の地図では20~30m級の大型のものであるが、もっとも大きな3号墳と2号墳はすでに消滅し、残りの1基は未調査である。第178次調査では、他にも旧石器時代の遺物や弥生時代中期墳の堅穴住居などが検出されている。

2 調査に至る経緯

平成13年4月9日、株式会社松本組から福岡市早良区南庄3丁目255番の一部・256番における埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。埋蔵文化財課では、同年5月22日に試掘調査を行った結果、溝とピット群を検出した。それを受け、松本組と平成13年度に発掘調査、14年度に整理・報告を実施することで合意し、同年6月18日付けで契約書を交わした。発掘調査は同年6月18日から開始し、同年9月7日に終了した。

調査組織

調査委託 株式会社松本組 代表取締役 松本優三

調査主体 福岡市教育委員会（文化財部埋蔵文化財課調査第1係）

課長 山崎純男 係長 山口謙治（13年度） 力武卓治（14年度）

調査担当 米倉秀紀

調査庶務 文化財部文化財整備課管理係

なお有田遺跡群の報告書は「有田小田部」31（福岡市埋蔵文化財調査報告書第574集1998）と同35（同657集2000）に一覧が掲載しているが、それ以降の調査報告書は次のとおりである。

有田小田部36 福岡市埋蔵文化財調査報告書第684集 2001 第115・168・180次

有田小田部37 福岡市埋蔵文化財調査報告書第725集 2002 第124・150次

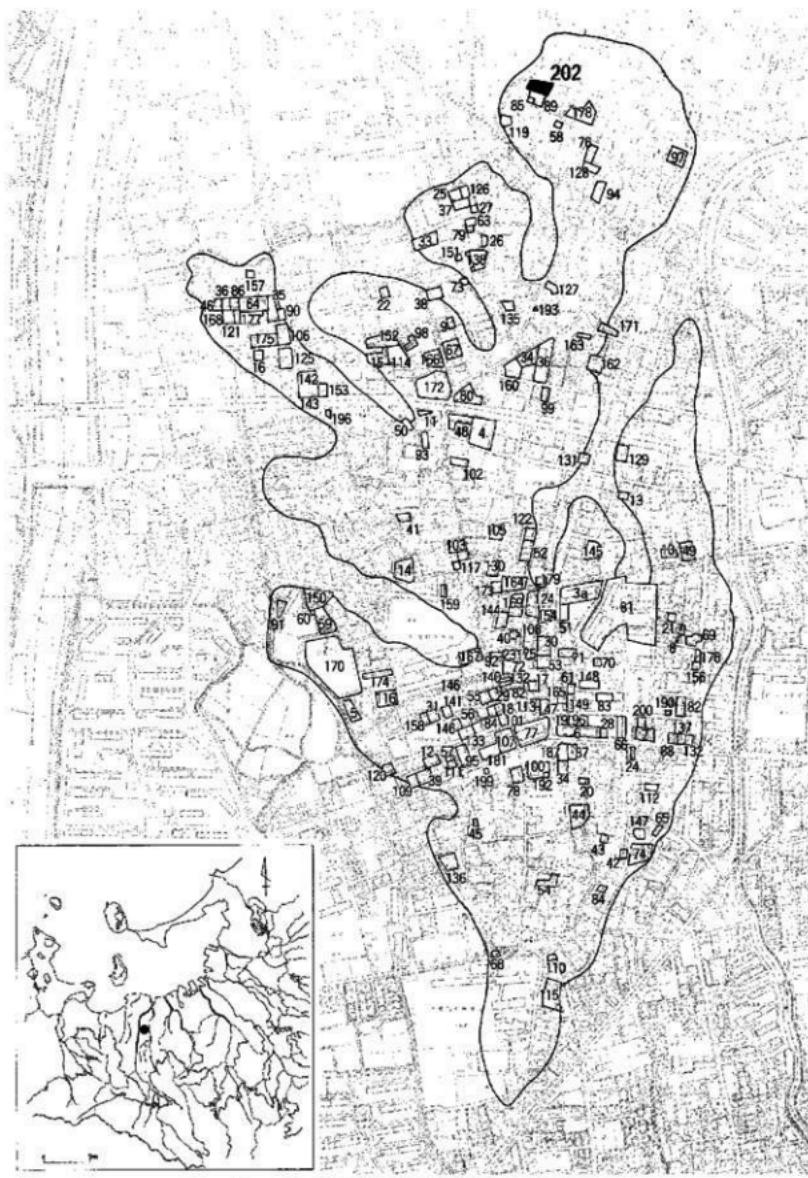


図1 有田遺跡群調査地点位置図 (1/8000)

3 調査の記録

(1) 調査の経過と調査の概要

発掘調査は東と西を半分ずつ行う予定で、6月21日に重機による表土剥ぎから開始した。調査途中で重機の搬入ができない事態となつたため、急遽、廃土を搬出し、残り半分の表土を人力で剥いだ。結果的には契約期間近くまで調査を行つたものの、南西部の一部の地区について調査することができなかつたが、そのほとんどは擾乱があると推定できる。

調査前は西半が家屋、東半が畠と樹木が植わっていた。表土から10~45cm下で遺構面である橙色ロームを検出した。遺構面は調査区中央付近に削平による段があり、それから東側は東に向かってゆるやかに傾斜する。本来は全体が台地中央部である東に向かってごく緩やかに傾斜していたと考えられ、台地の西端の方が高い。調査区東半部の段から東側には表土と遺構面の間に別の上層があり、調査区東端では3層あった。これらの層には若干の弥生土器を包含するが、中世以降の堆積層と考えられる。検出した遺構は方形周溝墓1基、円形周溝墓2基、土坑3基とピット等である。方形周溝墓の主体部からは小型彷彿鏡1面が出土した。また調査区の南東側には近代頃と思われるピット群と中世のピット少數があり、調査区西側の方形周溝墓南西コーナーを切る大穴からは昭和7年の銘がある陶磁器群などが出土した。9月7日に調査を終了した。

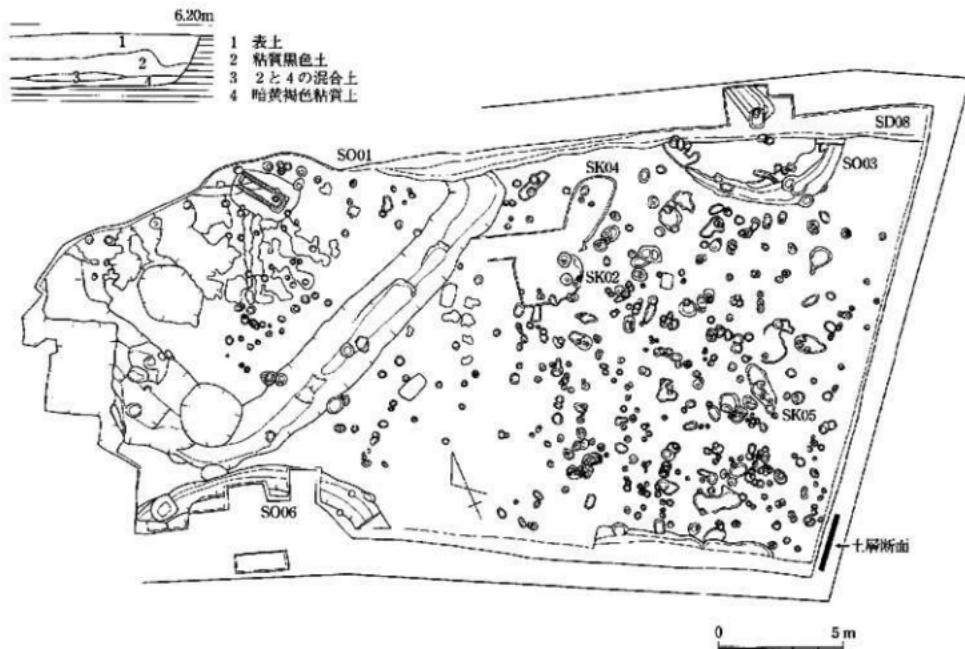


図2 202次調査全体図(1/200)及び上層断面図(1/40)

(2) 遺構と遺物

① 土坑

SK02 (図3、図版2)

調査区中央近くで検出した。北側をトレンチで壊されている。東西に長い隅丸長方形に近い。長さ約2.7m、幅約2mで、深さは約10cmと浅い。覆土は黒褐色粘質土である。この土坑に伴うと思われるピットの上部とピットのやや南側で、同一個体の弥生土器の大破片(図3-1)が出土した。他には弥生土器が小ビニール1袋が出土したが、いずれも細片である。

出土遺物 (図3)

1は弥生土器の壺で、現高24.7cm、肩部最大径26.8cm、底径約7.5cmを測る。底部内面が指で荒くなでられている以外は、全面丁寧なナデである。図の約1/2が遺存している。

SK04 (図3、図版2)

SK02の北側にある隅丸長方形の土坑で、南側はトレンチで切られている。長さ約2.8m、幅1.55m、床面までの深さ約13cmを測る。覆土は黒褐色粘質土で、弥生土器が小ビニール袋1袋出土したが、いずれも細片である。

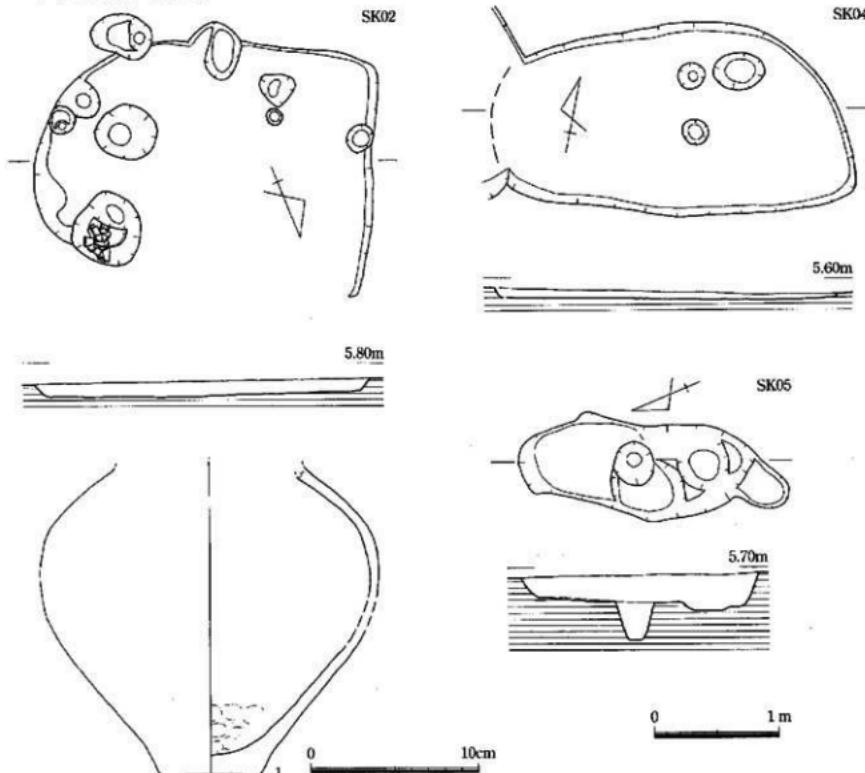


図3 SK02・04・05 (1/40) 及び SK02 出土遺物 (1/3)

SK05 (図3、図版1)

調査区東端近くにある長楕円形の土坑。南端をピットと切り合っている。長さ約2m、幅77cm、深さ22~28cmを測る。床面中央に深さ30cmほどのピットがあり、一見落とし穴状の形態を呈する。覆土はロームブロックを多く含む黒褐色粘質土である。土器の細片が最上部から数点出土した。

②円形周溝墓

SO03 (図4、図版3)

調査区東端近くの北壁際で検出した。全体の約半分が調査区北側に伸びる。検出面で丸く巡る溝のみを検出した。溝の残存状況は悪く、西側は一部で顕くなっている。東側の溝は2段掘りの形態になっているが、内側の段は新しい時期のものである。他にも新しい時期のピットや擾乱と切り合っている。当初溝のみを検出したため、調査途中で、主体部の予想される位置のみを一部拡張して、主体部を検出した。溝は最大幅約1m、最大深42cmを測る。周溝の平面形は歪んでおり、周溝跡の大きさは幅部分で6.8m前後、溝の外側上端で7.8~8.6mを測る。墳丘の有無は不明である。弥生土器が少量出土しただけで、墓に伴う遺物はない。

主体部 (図4、図版3)

調査区を北側に拡張して検出した。さらに調査区外へと続いているため長さはわからない。倒抜式

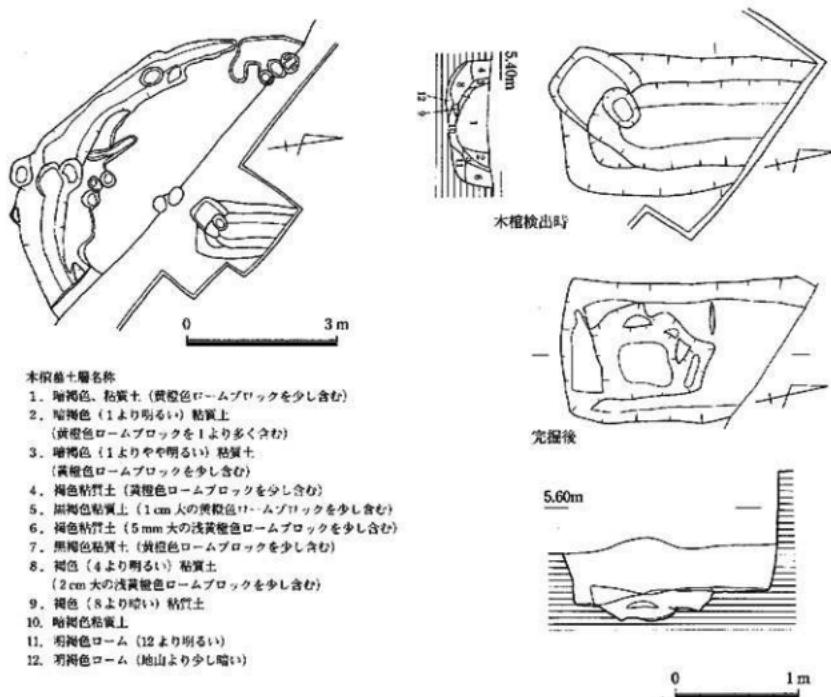


図4 SO03 (1/100) 及び同主体部 (1/40)

木棺墓である。調査前に樹木があったのか、南側小口の一部が極端に軟質化し、一部の土が乱れてい る。最終的には、その部分の床面がピット状の床面を呈したが、幸い土の乱れは大きくなく、検出時 には、木棺の形態を把握することができた。木棺墓は下部しか残っていない。掘方の長さ 202 cm + a 、幅 112 cm、深さ 37 cm、木棺の長さ 153 + a cm、幅 70 cm、深さ 30 cm を測る。まず掘方下部にロームを薄く数回敷いて棺台を作った後、棺をおき、その後掘方両側にロームをつめている。

S006 (図 5、図版 2)

調査区南西隅の調査区南壁で検出した。周溝の大半は南側隣接地である第 85・89 次に続き、全体 の約 1/3 を検出した。裾間の大きさは、長径約 12m、短径約 10m の楕円形を呈する。南側隣地と のブロックぎりぎりにトレンチをいたれたが、主体部は検出できなかった。溝幅は 0.76 ~ 1.15m、最大 深 21 cm を測る。出土遺物は弥生土器の小片のみである。

③方形周溝墓

S001 (図 5、図版 4)

調査区の北西端で検出した。調査前には家屋が建っていたため擾乱が激しく、溝の北西側周溝はほとんどのようなく、主体部も半壊している。南側周溝・南西側周溝はほぼ完存し、北側周溝と東側周溝の大半は調査区外にある。コーナー部分は南西と南東の 2 コーナーが確認できた。周溝の主軸は概ね N-24°-W である。東西方向は概ね復元でき、裾間距離は 15.5m 前後、溝の外側間の距離 18.8m 前後を測る。南北方向は不明だが、主体部中央で折り返すと、裾間距離 12.8m、周溝上端間距離 15.5m を測る。ただ、西溝の最北部がやや曲がっており、このやや先をコーナーとすると、南北方向は約 1m 短くなり、主体部は中央より北側になる。検出した南と西の二辺は溝幅が異なり、南溝は約 2.57m、西溝は擾乱が多くわかりにくいが、3.2m は越えている。溝の断面形はおおむね逆台形で、南溝の東底幅は 35 cm と狭い。南溝は二段に掘り込まれ、中央部分が長さ約 5m に渡って低くなっている。底の幅は逆に約 70 cm と広い。南溝西側はコーナーに向かって次第に高くなり、西溝とのコーナー部分の標高は、南溝中央と比べて約 70 cm も高い。西溝もコーナーから中央に向かって次第に深くなっている。恐らく四辺ともコーナー部分が高くなっているものと考えられる。盛り土は検出されなかつたが、溝掘削の土量や主体部の高さから考えて低埴丘があったものと思われる。

南溝中央部の一段低い部分からは、土師器高环 2 個体と甕 1 個体が出土した。また、溝の南側斜面に寄りかかるように、石棺の蓋石と考えられる石材が出土した。当初、この部分に何らかの主体部がある可能性を考えて掘り下がたが、土器・石はいずれも浮いて、高環は天地逆になり、掘り込みも認められずに全体が自然堆積であることから、主体部ではないと判断した。土器は埴丘からの転落遺物、石材は埴丘中央の主体部のものと考えられる。石材の下にはほぼ同規模の浅い掘り込み状の段があり、石材を投げ込んだ時にできたものと考えられる。そうすれば、石材の下のレベルは溝底の 5 cm ほど上にあることから、主体部は早い時期に破壊されたものと考えられる。

主体部 (図 6、図版 5)

埴丘中央近くにある主体部は箱式石棺である。主体部のすぐ東側に現代の井戸があり、井戸から引かれたパイプの掘方と他の擾乱によって主体部はかなり破壊されている。石棺の石はほとんど抜かれしており、残存しているのは北側小口と南側側壁のごく一部のみである。石棺内部からも若干の石材が出土した。石材はいずれも花崗岩である。石材の抜け跡から石棺の規模は推測でき、内法で長さ 180 cm 前後、幅 40 cm 前後を測る。残存する石材を見ると、北側小口は割れた石材が二重になっているが、石の状況から見て剥がれたものと思われ、破壊時に割れて外にめり込んだものと思われる。復元すると厚さ 3.5 cm の切石である。側壁もほぼ同程度の厚みである。石材の上には全面に黄白色粘土を敷き、

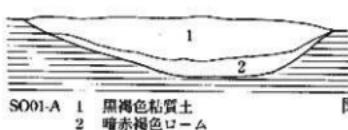
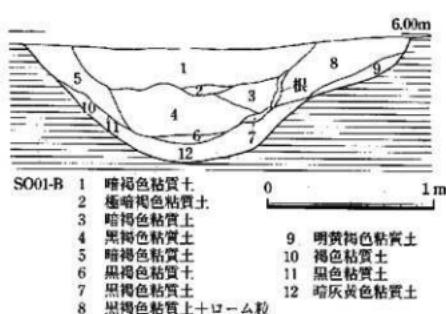
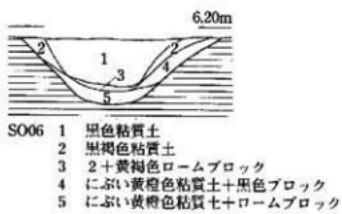
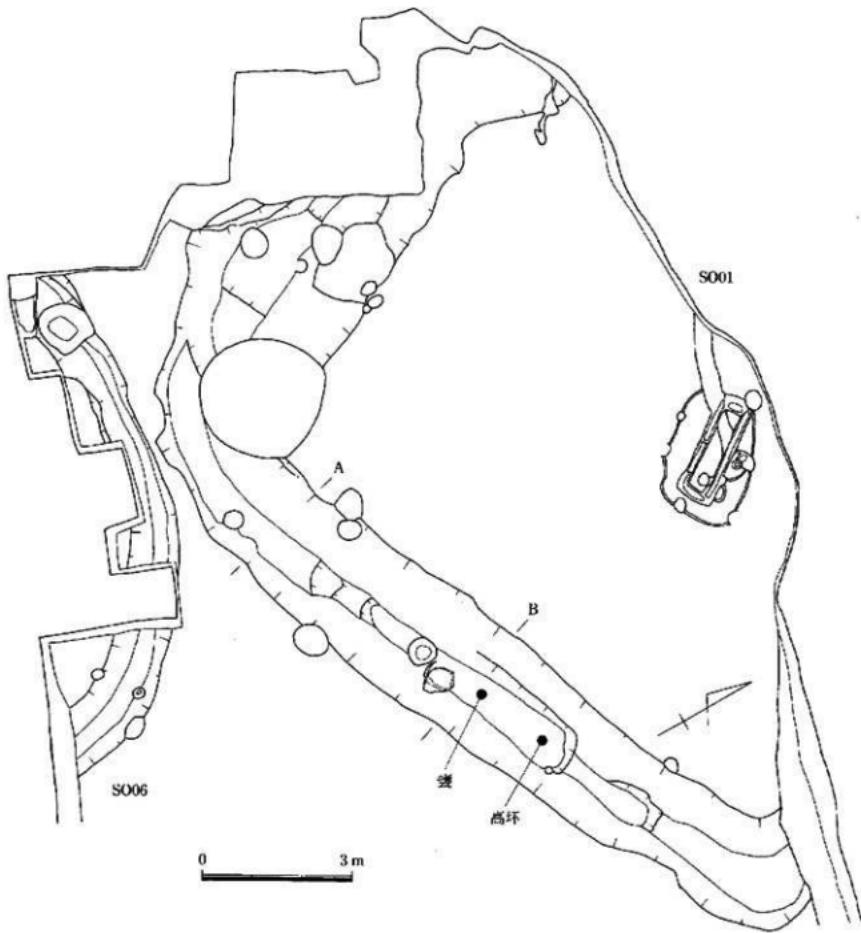
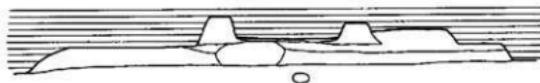
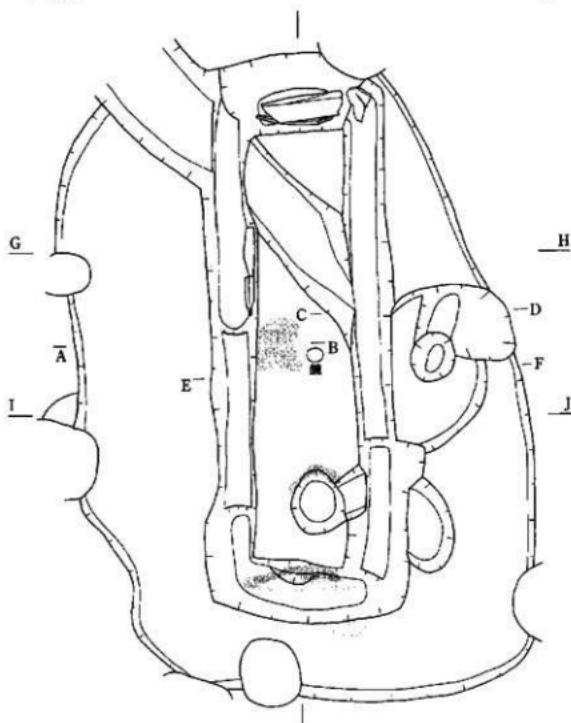


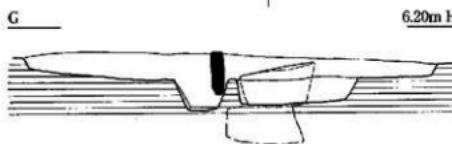
図5 SO01・06 (1 / 100) 及び同周溝土壠断面図 (1 / 30)



6.20m I



6.20m I



G

6.20m H

白色粘土
赤褐色

A

6.20m D



A-B, C-D の合体図

0

50cm

E

6.20m F

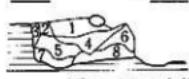


図 6 SO01 主体部 (1 / 20)

左土層

1 黄白色粘土

2 明褐色ローム

3 2より明るい

4 2より暗い

5 2+暗褐色粘土

右土層

1 黄白色粘土

2 暗褐色粘質土

3 2+橙色ローム

4 細色ローム

5 4+暗褐色土

6 橙色粘質土

1 暗褐色上

2 1+黄褐色粘土

3 黄褐色ローム+頸料

4 黄白色粘土+頸料

5 黄褐色ローム+頸料

6 5+黄白色粘土

7 6+黒色土ブロック

8 黄褐色ローム

その上に蓋石が乗っていたものと思われる。南側周溝で出土した石がこの石棺の蓋石であろう。床面には赤色顔料が敷かれているが、その多くが攪乱や根によって石棺内部覆土の上部まで上がっている。床面が遺存しているのは全体の半分に満たない。主体部の主軸は N-33° 30' - E を測る。

主体部から出土した副葬遺物は青銅鏡のみである。石棺内覆土の最上部から、鏡面を上にした状態で出土した。鏡の下を含めた周囲の土はすべて攪乱された上で、鏡が本来ここにあったのではないことは明らかである。石棺の蓋石除去後に石棺内部が埋まり、さらにその後に鏡がここに移動したものと思われる。可能性として、前述のパイプ設置時に掘りあげた上の中に入っていたことも考えられる。
周溝出土遺物 (図 7、図版 6)

周溝墓に伴う遺物は南側周溝から出土した十種類と石棺の蓋石と思われる石材だけで、ほかには弥生土器片などが出土した。2 ~ 8 は周溝墓に伴う遺物で、すべて土器である。2 は甕で、全体の 2 / 3 が遺存する。器高 18.9 cm、口径 13.9 cm を測る。胴部外面はハケメ、胴部内面は上部が横方向の粗いヘラケズリ、中下部が縱方向のヘラケズリである。色調は全体的に淡い橙色を呈する。胴部内面の随所に赤色顔料の固まりが付着している。顔料は塗布したような状況ではなく、残っている部分が小さな固まり状になっており、この甕の中に赤色顔料を入れていたものと思われる。主体部の石棺に使った顔料であろう。3 も甕で、復元口径 11.5 cm を測る。外面はヨコナデ、内面には横方向のヘラケズリを施している。4 は脚付鉢の脚部分と思われる。脚径 11 cm を測る。全面ナデ仕上げである。5 ~ 8 は高杯である。同一個体の可能性はあるが、接合しない。7 と 8 は 2 の東側で、溝底から約 20 cm の高さで、口縁部を下にした状態で出土し、近くに脚部はなかった。5 は遺存状況が悪く、全面ナデ仕上げであると思われる。6 は口径 13 cm を測る。ほぼ全面ナデで仕上げている。7 は口径 16.8 cm を測る。体部中央付近に段を有する。内底部はやや粗いナデで、他は丁寧になでてある。8 は口径

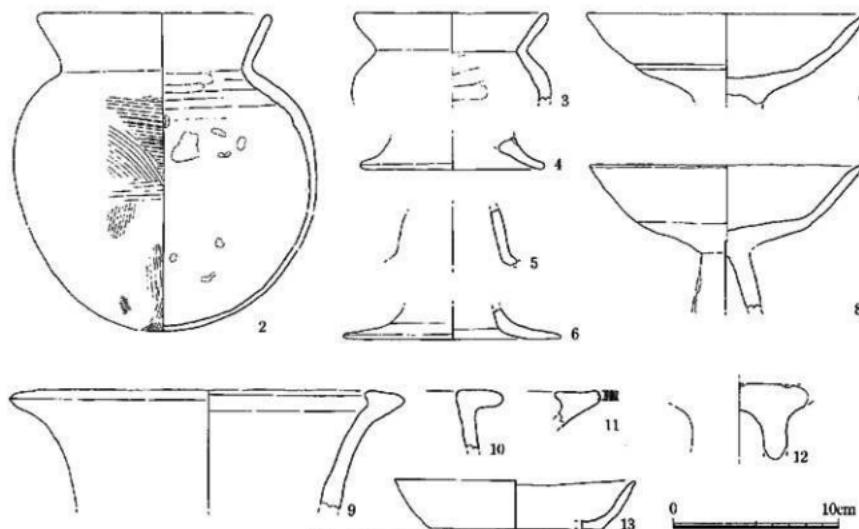
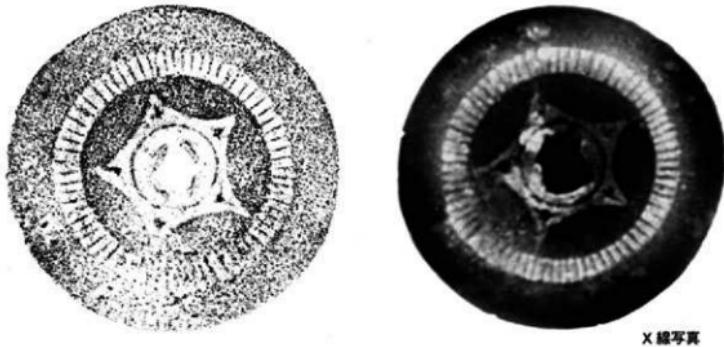


図 7 SO01 周溝出土遺物 (1 / 3)

16.4 cmを測る。体部に段はつかないが、7とほぼ同じ位置で屈曲する。筒部最上端は径3 cm強と狭い。体部全面と筒部外面はヨコナデ、筒部内面は横方向のケズリである。9以降は本来周溝墓に伴うものではない。9～12は弥生土器である。9は臺の口縁部で、復元口径23.3 cmを測る。T字形に近い口縁部で、器壁が1.1 cmと厚い。全面丁寧なナデ調整を施している。10・11は口縁部の細片で、11の口縁端外面には刻目を施している。12は高坏である。13は土師器の坏で、北側のSD08のものなどが混ざったものであろう。復元口径14.4 cm、器高2.9 cmを測る。口縁部は歪んでおり、水平ではない。底部は糸切りである。

主体部出土遺物（図8、図版6・表紙）

主体部から出土したのは、若干の弥生土器片・石棺材と青銅鏡1面である。14は仿製内行花文鏡である。棺内中央付近の最上部から出土した。前述のように本来の位置ではない。ほぼ全面に赤色顔料が付着していた。図の右側が鏡背に向かって歪んでいる。また図右上の外縁の一部がわずかに剥落しているが、他に欠損箇所はない。ほぼ全面綠青に覆われているが、器面の保持は良好である。鏡面側には削痕状の線が無数に付いている。特に前述の歪んでいる部分の鏡縁付近に線の方向と平行に、幅1 cmの中に1～1.5 mmの間をあけて細い削痕状のものが平行して無数に入っている。これらの線とは少し方向を変えたものが鏡面中央付近で確認できる。線の状況からは木質が残存した可能性もあるが、確認できなかった。面径は6.95～7.01 cmを測る。外区は幅約1 cm前後の素縁、幅4～6 mmの櫛歯文帯、内区は五弁の内行花文帯、一重の圓線と鈕から成る。各花文間に珠文状もしくは十字状に近い文様がある。文様は明瞭に識別できるが、図の左下のみ鋳上がりが悪いためか、やや判別がしづらい。鏡縁の厚さ0.20～0.24 cm、鈕の高さ0.44 cm、鈕の大きさ1～1.05 cmを測る。鈕孔の断面形は台形に近い。



X線写真

図8 SO01 主体部出土青銅鏡 (1/1)

④ 溝

SD08

調査区北壁沿いに検出した、幅約1m、深さ約10cmの溝である。溝というより段落ちに近いが、弥生土器と中世遺物のみが出土した。新しい時期の遺構である可能性も考えられる。

出土遺物(図9、図版7)

15は白磁の皿で無高台である。外底部は露胎で、底径5cmを測る。見込みに線彫りで花文を描いている。釉調はやや黄色みを帯びる。16は青磁碗で、高台径約6.2cmを測る。外底部は露胎であるが、疊付に釉が付着している。釉調は緑黄色を呈する。17は土鍤で、長さ4.1cm、幅の最大径1.4cm、孔径5mm前後を測る。

⑤ ピット出土遺物(図10、図版7)

ピットは中世のものと近現代のものがあったが、ほとんどすべてのピットに根が入り込み、分別が付かないものも多かった。出土した遺物は中世の土器・陶磁器の他、弥生土器片・黒曜石で、総量で浅いコンテナ1箱に満たない。18はピット202出土の弥生土器の甕で、口縁下に幅広の三角突帯を1条施す。調整はナデである。19は口縁端部が丸みを帯びている。全面ナデで仕上げている。ピット207の出土。20は復元口径24.6cmを測る。弥生土器の甕で、口縁下に三角突帯1条を施している。全面横ナデで仕上げている。ピット106出土。21は土師器の碗で、断面が丸みを帯びた高台を持つ。高台径約7cmを測る。色調は淡橙色を呈する。ピット107の出土。22は土師器の皿で、口径8.4cm、底径5.4cm、器高1.55cmを測る。底部糸切りである。体部の1/3を欠失している。ピット111の上部で斜めの状態で出土した。23も底部糸切りの土師器皿で、口径8.9cm、底径7.4cm、器高1.05cmを測る。ピット125の出土。

⑥ 包含層・廐上等出土遺物

表上や調査区東側にある薄い包含層・廐土などから出土した遺物である。24は弥生土器の甕で、細片のため傾きは不確かである。外面に縱方向のハケメを施す。包含層出土。25は弥生土器の甕の底部で、底径7.2cmを測る。1.5cmの上げ底である。外面ナデ調整、内面は指頭押圧のナデで仕上げている。廐土中出土。26も甕の底部で、底径6.9cmを測る。0.5cmの上げ底で、外面は縱方向のハケメ調整、内面は指頭押圧で仕上げている。包含層出土。27・28も甕の底部。ともに包含層出土。27は底径5.4cmでナデ仕上げ、28は底径6.7cmで外面は縱方向のハケメ、内面ナデ仕上げである。29は器台で、脚径9.6cmを測る。外面は縱方向のハケメ、内面はナデ調整を施す。30は底部糸切りの土師器皿で、口径7.1cm、底径6.2cm、器高1.1cmを測る。廐土中の出土。31も底部糸切りの土師器皿で、推定口径12cm強、底径8.9cm、推定器高2cm弱を測る。廐土中出土。32は白磁碗の口縁部で、玉縁を呈する。包含層出土。33は土鍤で、長さ4.5cm、最大径1cm、孔径3mmを測る。包含層出土。34は包含層出土の漆黒曜石製石鏃である。長さ1.62cm、幅1.21cm、厚さ0.25cm、重さ0.40gを測る。二等片三角形の形状を呈する。押圧剥離は丁寧ではない。35は漆黒曜石製で、現長1.49cm、現幅1.12cm、厚さ0.45cm、重さ0.95gを測る。厚みがあり、剥離も不十分であることから石鏃の失敗品と思われる。包含層出土。36は縱長剥片を利用したもので、両側縁に使用痕が認められる。但し全体のバティナが古いのに比べ、使用痕の剥離はバティナが新しく、あるいは旧石器時代の剥片を弥生時

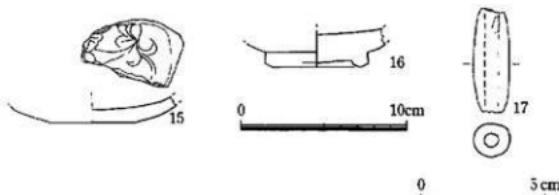


図9 SD08 出土遺物(1/3, 1/2)

代に利用したものかもしれない。長さ 3.37 cm、幅 1.63 cm、厚さ 0.45 cm、重さ 2.21g を測る。やや灰色を帯びた黒曜石製で、遺構面掃除中に出土。

⑦旧石器時代の遺物

遺構・包含層から出土した旧石器時代頃と考えられるが 3 点あった。第 178 次調査では、ナイフ形石器・網石核など 7 点の旧石器時代遺物が出土している。当調査区でも旧石器時代包含層の遺存を考慮して、2 × 2m のグリッドを設定して任意に 4 カ所掘り下げた。グリッドからは遺物は 1 点も出土

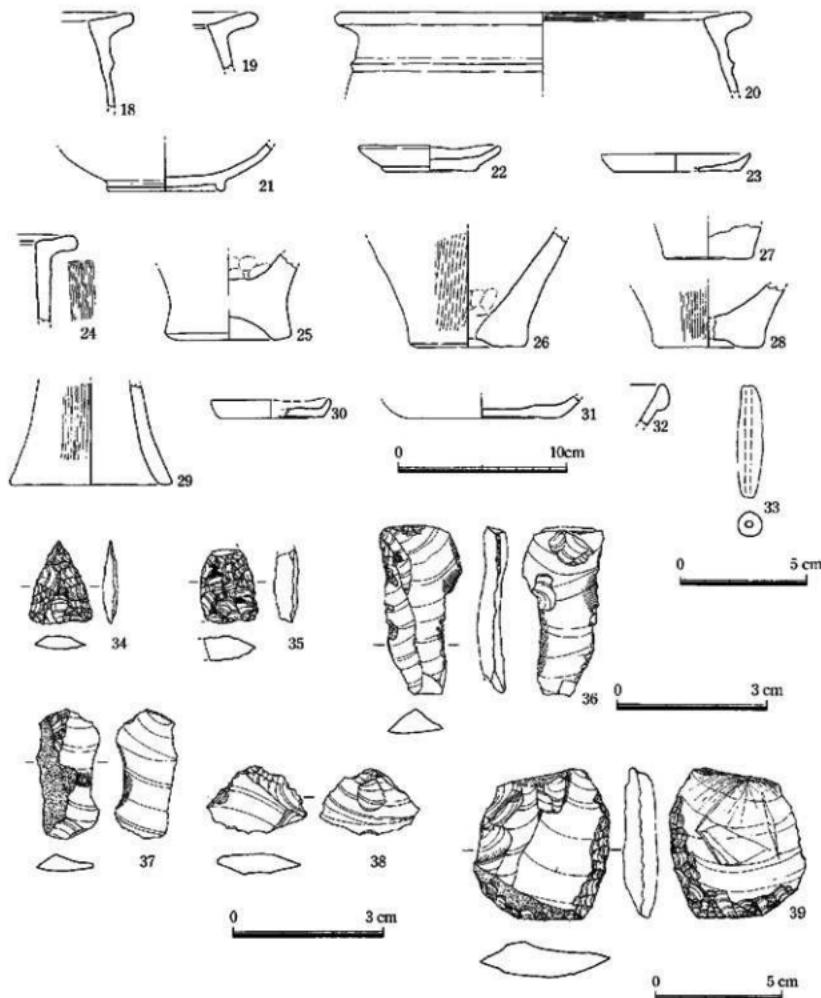


図 10 ピット、包含層、その他及び旧石器時代出土遺物 (1 / 3, 1 / 2, 1 / 1)

しなかったが、遺構覆土などからバティナの古い旧石器時代ないしは縄文時代の初期と考えられる遺物が3点確認できた。37は縦長の剥片で、片面に自然面を残す。打面は自然面である。長さ2.57cm、幅1.15cm、厚さ0.38cm、重さ1.05gを測る。縞状の青灰色黒曜石製で、ビット129番上。38は横長の剥片で、打面調整を行っている。長さ1.32cm、幅1.95cm、厚さ0.35cm、重さ0.70gを測る。黄色粒子を含む黒色黒曜石製。39は安山岩製スクレイパーである。長さ5.97cm、幅5.23cm、厚さ1.32cm、重さ45.65gを測る。大きな縦長の剥片を用いている。打面は自然面である。凸に鴻曲する面と下部の自然面に両面から調整を加えている。形態的には縄文期のものと思われ、バティナが進んでいることや頭部に刺離面調整があることから、縄文時代初期の可能性が高い。

③調査区西側攪乱出土遺物（図版7）

調査区の西側、SO01の南西コーナー付近に、大きな攪乱が1つあり、中から近代の遺物が大量に出土した。「昭和7年」「福岡市西新町杉屋第二酒場」等銘有田焼染付酒樽、「西新町東屋金堀酒店」等銘有田焼染付徳利、「石道ラムネ伊佐商会」銘ガラス製ラムネ瓶の他、磁器製パレット、白磁人形、プラスチック製櫛、笄、銅鏡のほか様々なガラス製品・陶磁器製品の日常雑器がコンテナ6箱分出土した。穴は直径約2.4m、深さ約65cmのすり鉢状の穴で、単なるゴミ捨て穴にしては大きい。旧土地所有者の話では地内に防空壕があつたらしく、有田遺跡の他の地点で見つかっている方形の大形防空壕ではなく、一人用の蛸壺と呼ばれる防空壕かもしれない。

4 まとめ

今回検出した遺構のうち、中心をなすのは古墳時代前期の周溝墓3基である。3基の周溝墓のうち時期が明確なのは方形周溝墓のみで、周溝から出土した土器を見ると、甕は直線的に外傾する口縁部と、口縁部と胴部の境内面の種が明確なのが特徴である。高环は、細身の脚と低く長い脚裾、あまり屈曲しない环部が特徴的である。おおむね布留新段階でも新相近く、5世紀前半代になろう。

周辺の調査を含めると、10基の周溝墓が見つかり、19基の主体部が見つかっている。内訳はそのほとんどが円形周溝墓または主体部単独のもので、方形周溝墓は今回初めて検出された。周溝墓の規模をみると、直径または一辺が15m以上が2基、10~15mが4基、10m未溝が4基である。今回の方形周溝墓は、一辺12.8m以上15.5m前後あり、178次調査SO150（復元径19m）に次ぐ規模である。主体部は様々で、木棺墓・土塚墓・箱式石棺墓・木蓋？石棺墓・竪穴式石室・石蓋土塚墓・壺棺墓など、多種多様である。時期的にはすべて古墳時代前・中期で、古墳時代初期を含まず、須恵器出現以前、おおむね4世紀後半から5世紀前半に属するものと考えられる。当地周辺には未調査区がまだ多く、墓の数はさらに増えるものと考えられる。

さらに、有田遺跡群にはこの他にも3基の円墳があり、1基が現存している。消滅した有田3号墳は明治年間の地形図から復元すると直径30m近い大型円墳である。現存する2号墳も高い墳丘をもっている。これら円墳3基は墳形や周辺状況から本調査区周辺前後の時期の可能性が高い。3基の円墳に比べると、当地区の方形周溝墓は墳丘があつても低墳丘であったものと思われる。しかし一辺15m前後とこの地区では2番目に大きく、かつ唯一の方形周溝墓で、鏡が出土している。鏡は径13.5mのSO120の上体部（組合式木棺墓）からも出土している。SO120では、勾玉群などからなる腕飾りも出土している。もっとも大きい178次調査SO150の主体部は組合式木棺墓であるが、約半分の検出にとどまり、副葬品の有無は判然としない。他に上器以外の副葬品は出土していない。

以上を眺めると、円墳3基は主体部も副葬品も明かではないが、副葬品が出土した周溝墓2基が周

溝墓群の規模から2番目・3番目であること等からも、有田遺跡の墳墓群の中では円墳3基→大型周溝墓→中型の周溝墓→小形の周溝墓の序列を伺える。単独の墓については別途の要素を考えなければならないだろう。大形周溝墓の2基は時期的にSO120→SO01であり、円墳を含めて、2から3世代に渡る墳墓群と考えられる。有田遺跡では4世紀初頭から6世紀代の堅穴式住居址が連続と作られているが、特に4世紀後半から5世紀前半代の住居址はかなり作られており、これらのムラの支配者クラスの墳墓群ということができるだろう。

早良平野の古墳を眺めると、前方後円墳集成1・2期は藤崎の方形周溝墓群（主体部木棺・箱式石棺）と五島山古墳（円墳？・主体部箱式石棺）があり、それぞれ舶載鏡を副葬している。該期に近い集成3期後半には早良平野で初めての前方後円墳が、室見川西岸の丘陵上に2基築かれるが、いずれも20m前後の小型である。羽根戸南G-2号墳は全長26mで主体部は箱式石棺。位至三公鏡が出土。同G-3号墳は20mで、主体部は削竹形木棺で内行花文鏡の破鏡や折り曲げた鉄劍などが出土した。4期には75mの拝塚古墳が平野部に築かれ、初めてやや大形の前方後円墳が登場する。

以上を見ると、早良平野の前期古墳の特質として、以前から言われていることであるが、大型墳の不在、墳墓形態・主体部形態の多様性、埋葬品の非集中が挙げられる。3期まで平野の盟主墳といるべき占墳が存在しないことから考えると、3期まではムラ毎に統括者がいるだけで、海岸部のムラが大和政権とつながりが深く優越していたが、4期になり初めて平野を統括する支配者の墓が出現したと考えていいかもしない。有田遺跡の墳墓群はほぼそれと重なる時期の小豪族の墓地といえよう。

SO150：19.0m、組合式木棺、副葬品不明

SO120：13.5m、組合式木棺、仿製鏡・玉製腕飾り

SO06：約12m、主体部不明、副葬品無

SO160：8～10m、土壇墓、副葬品無

SO130：7m、石棺墓、副葬品無

SO01：15.5m未溝；箱式石棺、仿製鏡

SO170：10.5～14m；石棺・土壇墓、副葬品無

SO140：11.2m、堅穴式石室、副葬品無

SO03：8m前後、剖貫式木棺、副葬品無

SO110：5.5m、石蓋上壇墓、副葬品無

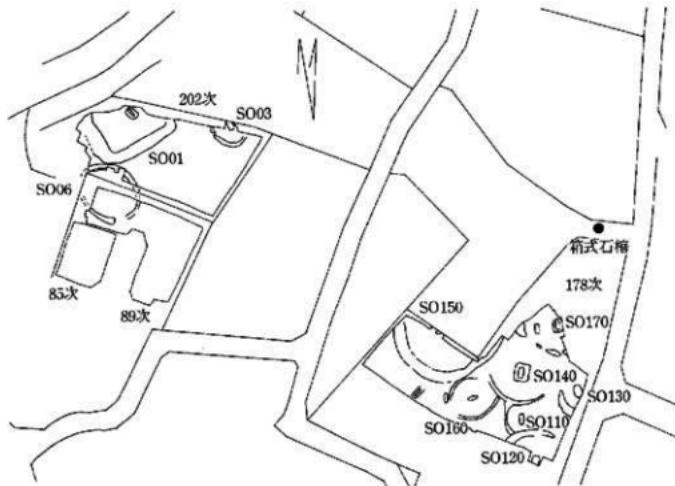


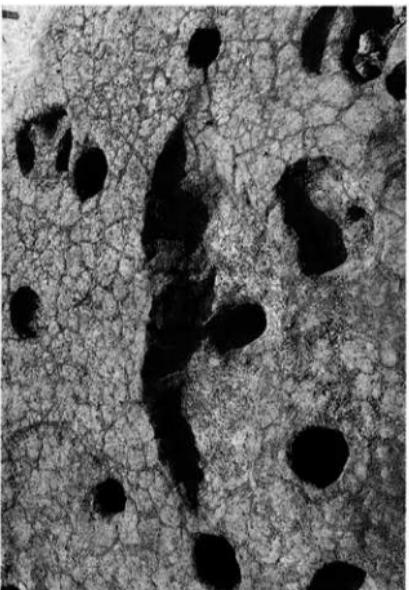
図11 202次調査区周辺の古墳時代墳墓配置図 (1 / 1,000)



① 全景（西から）



② 調査区前東隣ヒット群（北西から）



③ SK05（西から）

図版 2



① SK02・04 (山東から)



② SK02 遺物出土状況



③ SO06 (山東から)

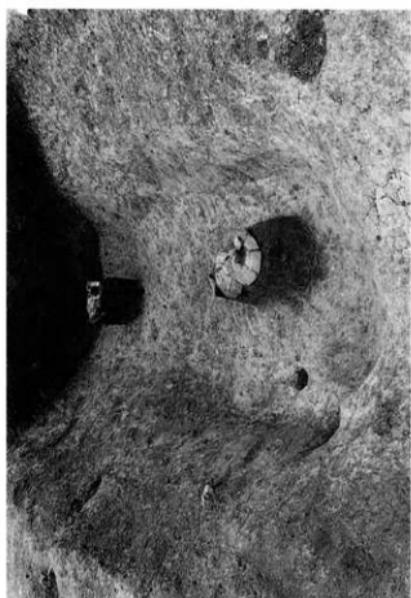


④ SO06 周辺土層断面





① S001 周溝出土剖面



② S001 周溝遺物出土情況



③ S001 周溝出土石器



④ S001 主体逐層掘出土情況



① S001 主体部小口部検出状況



② S001 主体部（北から）

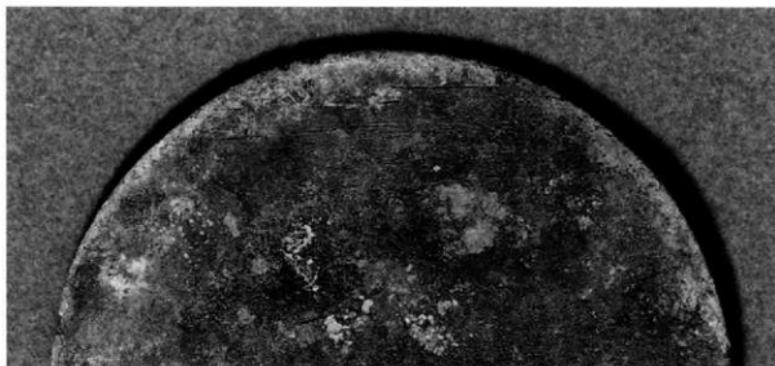


③ S001 主体部（北東から）



④ S001 主体部掘り方（南東から）

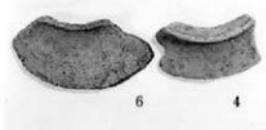
図版 6



5



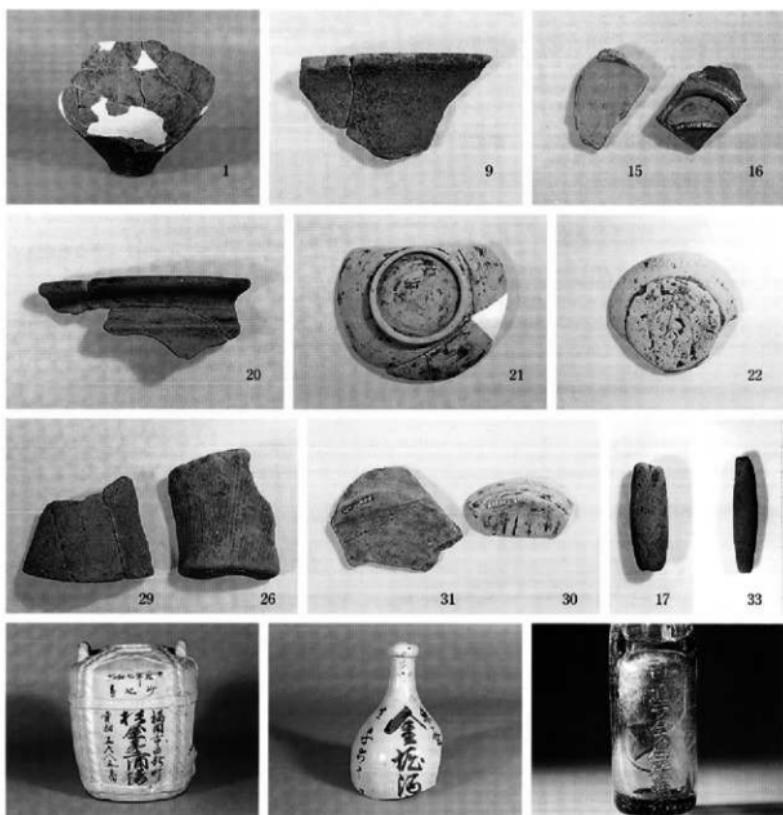
6 4



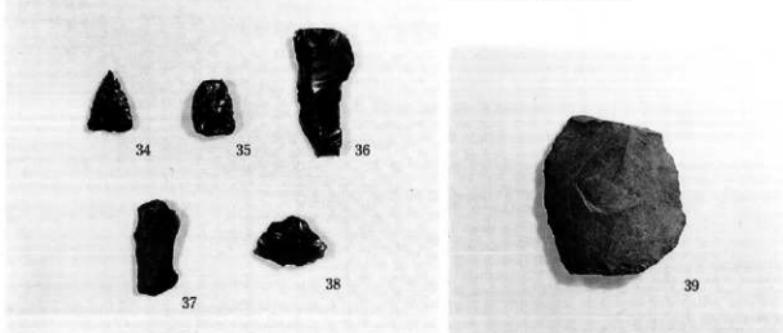
7

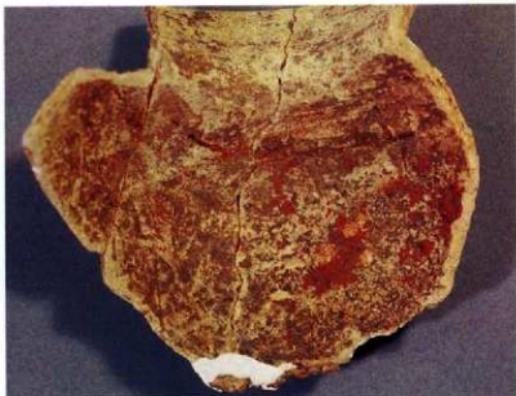


3



カクラン出土遺物（上 3 点）





SO01 周溝出土土師器に付着した赤色顔料塊

有田・小田部 38

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第735集

2003年(平成15年)3月31日

発 行 福岡市教育委員会

〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8の1

印 刷 寿印刷株式会社